池田亀鑑文学碑
(日南町神戸上)

池田亀鑑・生誕の地(鳥取県・日南町)

もっと知りたい 池田亀鑑と「源氏物語」

とき　3月13日(土)

午後1時30分～4時

ところ　日南町総合文化センター

多目的ホール　0859-77-1111

参加費　資料代　300 円

多くのみなさんの参加をお待ちしています

「源氏物語」を中心とした平安文学研究者が語る、それぞれの池田亀鑑

国文学研究資料館蔵『源氏物語団扇画帖』「絵合」

小川陽子 氏 ◆池田亀鑑と後継者たち

■　独立行政法人国立高等専門学校機構･松江工業高等専門学校・助教、博士(文学)

■　著書　『『源氏物語』享受史の研究』2009 年、笠間書院

原 豊二 氏 ◆池田亀鑑の資料収集

■　独立行政法人国立高等専門学校機構・米子工業高等専門学校　准教授、博士(文学)

■　著書　『源氏物語と王朝文化誌史』2006 年、勉誠出版

伊藤鉄也 氏 ◆若き日の池田亀鑑

■　国立大学法人・総合研究大学院大学／人間文化研究機構・国文学研究資料館　教授、博士(文学)

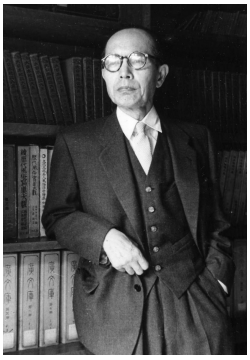
■　編著書　『源氏物語別本集成　正・続　全 30 巻』(1989 年～21 巻まで刊行中、おうふう)

国文学研究資料館蔵『源氏物語団扇画帖』「若紫」

■主催　池田亀鑑文学碑を守る会・石見まちづくり協議会　■ 事務局(石見地域振興センター) ８３-０７１１

■後援　日南町・日南町教育委員会・新日本海新聞社・山陰中央新報社

池田亀鑑先生略歴



池田亀鑑先生は、明治二十九年十二月九日厳父宏文慈母とらの子として神戸上に生まれる。幾多の困苦と欠乏に耐え、よく努力し鳥取師範を経て東京高等師範に学び東京帝国大学文学部国文科を卒業する。女子学習院、第一高等学校、二松学舎、慶応義塾、早稲田、帝国女子専門学校、東洋等各大学の講師又は助教授。大正大学、東京大学の教授等を歴任し、昭和二十二年には文学博士号を授与される。中古古典文学、特に源氏物語の研究においては斯界の第一人者と称せられ、爾後の指針とされた。著書は源氏物語大成全八巻他多数。毎日学術奨励賞、朝日文化賞等を受賞する。昭和三十一年十二月十九日病を得て東京に没す。行年六十才。その悲報に衝撃を受けた厳父宏文氏も同日逝去される。先生のふるさと神戸上への想いは随筆集「花を折る」等で熱く述べられている。尚文学碑は、昭和四十三年十二月九日建立除幕された。

池田亀鑑文学碑を守る会

池田亀鑑
随筆集「花を折る」(中央公論社刊・昭和三十四年)より

私のふるさと

岡山驛を出た伯備線の列車が、高梁川に沿うて北上し、中國山脈をこえて鳥取縣にはいつて最初の驛、そこでおりて、また小さな谷川を一里ばかりさかのぼると、三方山にかこまれた小さな部落がある。そこは、わたくしの生涯わすれることのできない、なつかしいふるさとである。この平和な谷間には、西日がおちてから、長い薄明のたそがれがつづいた。濃い紫、深い青、その夕靄の中に、少年たちのたのしい夢があつた。山には早くから雪がくる。爐のほとりで、吹雪の夜の行きだふれの話や、雪女の話しをきいた。正月備中からやつてくる獅子舞のグロテスクな恰好が、たまらなく郷愁をさそふ。「娘も先月嫁入り申し候、取入れも相すみ、これより當分冬ごもりに候」と昔なじみの友だちから便りがあつた。今夜はあの平和な谷間には粉雪がしんしんとまつてゐるであらうか、それとも青い星が一つ、お伽話のやうに、きらきらとまたたいてゐるであらうか。

(BK放送二五・十二)(BK・二六・一)

谷間の正月

わたくしは中國山脈の中の小さな部落で大きくなつた。その村は、日野川の一支流が、備中と伯耆との國境を發して、細い谷川をなしてゐる山の中であつた。神代の昔、ヤマタのオロチが住んでゐたといふところも、そう遠くはない。三方に山があつて、朝日はおそくのぼり、夕日は早くおちて、谷間には薄明の時間が長い。紫色に淀む靄の中に點々と明滅する灯は、わたくしの思い出を美しいものにしてくれる。

何しろ、郵便屋さんが、二里半ばかり離れた町から、峠をこえてやつてくる、それでも大雪でもふると、三日位はすがたを見せない、といつた山奥なので、わたくしたちは、谷間だけの生活を築き、そこに生きる意味を見出すよりほかはない。

さういふ谷間の正月は、わたくしにとつては、一つの藝術であり、そして哲學である。わたくしは、その中に少年の日の詩心をやしなひ、正義や倫理の芽生えをつちかつてきた。